

# 尾八重神楽の音楽 ③

黒 木 亜 美 子

The Music of Ohae Kagura

Amiko KUROKI

## 1. はじめに

著者はこれまでに宮崎県西都市尾八重地区に伝わる「尾八重神楽の音楽」について①<sup>注1)</sup>、②と書いてきたが、ここで改めて尾八重神楽について初めて読む人の為に、その由来、番付等を再度書いておきたいと思う。<sup>注2)</sup>

## 2. 尾八重神楽の由来

尾八重神楽は、保安2年(1121)米良山中尾八重湯之片を安住の地と定めた壱岐宇多守(鑓三権現と言ひ、湯之片神社の祖)が当地に神楽伝習所を設け普及させたと伝えられている。

壱岐宇多守は鎮西志摩壱岐・原一姓也、清和源氏より出ずるとある日向国三宅<sup>ミヤケ</sup>に88丁の知行を授かり、国分の地に社人として迎えられたのが始まりとされている。

壱岐宇多守は権威ある神主で、現在の西都市妻萬(都萬)神社に社人として奉仕、易事にも秀でた法者でもあったという。壱岐宇多守は神主だけに停ることなく、更に己を磨く為、法者の進を究めるべく修験者となり、米良山中湯之片の地に移り住む決意をしたのである。湯之片の地を世襲して壱岐家の祖となった宇多守は、妻萬神社<sup>注3)</sup>社人と神道問答あり、その中で宇多守曰く、三歳和同の儀これを如何にと問うに、妻方の社人、月は28夜(宿星)を以って終るに29夜に月はなしと返した、更に宇多守曰くに、月の蘇生は33夜にして甦る。すなはち女躰に映し、日、月の和銅(三歳の儀)を以って蘇生すると解き躰人倫を36の運命なりと問々返すその時、壱岐宇多守、東の空に見ゆるは何物ぞ、あれこそ33夜の月なるぞ、願い事あらば、あの月に祈れと、持っていた日の丸の扇を翳し仰いだという。その様子を見ていた妻方の民衆が騒ぎ出した。唯事ならぬ気配である。妻方社人が負けた、妻方社人が負けたと大騒ぎ、そんな事は尻目に、妻方社人首用の面を持ち帰ったのである。

その後、壱岐宇多妻萬神社に出向奉仕するに至り妻方民衆の恨みをかい、殺意を感じた宇多守は、妻萬神社境内の楠木に登り身を隠すも、水面に我身が映り愴殺されたのである。

宇多守愴殺の後、妻地方に度重なる災難等発生、心配になった妻方の社人や民衆等、ただならぬ災い事と思ひ法者に託宣するに、権威ある壱岐宇多守を愴殺したことによる祟りとお計が出た。この災難等を治めるには宇多守を鎮め祀れのお計に妻方社人民衆集いて、妻萬神社境内の楠木の根本に清水出ずる所あり、そこに祠を造り鑓三権現として鎮め祀られている。

後世、時の米良領主(菊池)米良弾正重秀公忠勤感極まって、湯之方村壱岐永権現を崇る事にな

り米良領主自ら勅使遣わし京都北白川宗家のお墨付を賜り湯之片若宮大明神の神格拝受、壱岐家家敷内に華屋を建て祀られたのである。もとより湯之片神社は北白川家のお墨付を賜っている神社であるが故に尾八重の領主黒木兵庫頭重常を攻略した後の米良弾正とて湯之片神社壱岐家に踏み込む事はできない事を知っていたが、黒木兵庫頭重常の奥方は、いち早く湯之片神社の壱岐家に託し黒木累代継盛を願い黒木領主は自刀したのである。

尾八重神楽の祖である壱岐宇多守槍殺の謂意を元に神庭の逆幣 36 本の謂意が込められているのである。同時に逆の柱に 33 本麻緒結も同意である。いずれにしても、尾八重神楽は修験色が強く、特有の鎮魂動作が見られる。

「ヘンペ」（反問）「カラス飛び」といわれる所作は他に類を見ない独特の足を運ぶ動作と思われる。カラス（烏）飛びの動作は、修験者が修行の為、山に籠り入ると、唯一下界の事を知る手段として烏を使鳥として崇めていたのである。

神の使い、靈感鳥としての烏が飛び跳ねる様子を見て、修験者の山渡り、石跳行の姿に置き換えて尾八重神楽の所作に取り入れたとされている。（後述考察参照）

尾八重神楽の特徴は山岳民族の象徴である山の生活や狩猟の様子を神楽化（16. 獅子舞等）した舞が多く、優美で勇壮な神楽となっている。～湯之片神社祖師・尾八重神社宮司、中武貞夫氏談～

### 3. 尾八重神楽の番付

（表 1）

壱番	貳番	参番	四番	五番	六番	七番	八番	九番	給番	拾壹番	拾貳番	拾参番	拾四番	拾五番	拾六番	拾七番	拾八番	拾九番	貳拾番	貳拾壹番	貳拾貳番	貳拾参番	貳拾四番	貳拾五番	貳拾六番	貳拾七番	貳拾八番	貳拾九番	参拾番	参拾壹番	参拾貳番	参拾参番
逆上（しめあげ）	清山（きよやま）	地割（ちわり）	幣差（ひさし）	花鬼神（はなきじん）	大神神楽（だいじんかぐら）	宿神地舞（しゆくじんぢまい）	宿神（しゆくじん）	鎮守神楽（ちんじゆかぐら）	八幡（はちまん）	八社神楽（はつしやんかぐら）	八子舞（やこんまい）	稻荷鬼神（いなりきじん）	四方鬼神地舞（しほうきじんぢまい）	四方鬼神（しほうきじん）	獅子舞（ししまい）	磐石（ばんぜき）	神和（かんなぎ）	四人神崇（よつたりかんすい）	一人劔（ひとつるぎ）	大将軍（だいしょうぐん）	柴荒神（しばこうじん）	綱地舞（つなぢまい）	綱荒神（つなこうじん）	綱神楽（つなかくら）	繰落し（くりおろし）	衣笠荒神（みかさこうじん）	伊勢神楽（いせかぐら）	手力（たちから）	戸開（とひらき）	お清（おきよ）	百式拾番（ひやくにじゅうばん）	舞上（まいあげ）
一人舞（お面）	五人舞	一人舞	二人舞	一人舞	二人舞	一人舞	四人舞（お面）	二人舞	一人舞（お面）	一人舞	一人舞	一人舞	一人舞（お面）	二人舞（お面）	十二人舞	一人舞	二人舞	二人舞	二人舞	一人舞	二人舞	二人舞	一人舞	二人舞	一人舞	八人舞	二人舞	一人舞	四人舞	五人舞	三人舞（お面）	一人舞（お面）


#### 4. 拾六番 獅子舞・荒神<sup>注4)</sup>


②で論述した14.「四方鬼神地舞」と15.「四方鬼神に続く番付」で、DVDの解説によると、“獅子と荒神の舞（獅子の霊を祀る）狩猟民俗の生活と獅子<sup>注5)</sup>との共存を伝える神面の舞”とある。

まず紋付き<sup>注6)</sup>の白素襖をまとい、毛頭を被った舞人が二人登場する。

正面に向かって拝礼、鈴を1回鳴らし、左手に始めは閉じた扇を持って舞い始める。舞い始めると扇を開き、ジャラジャラと鈴を鳴らしながら舞う。この鈴は、他に手首をきかせて手前に規則正しく引く鈴の使い方とは別である。再び扇を閉じてレーソーラーソーラーの笛に合わせて鈴を鳴らし、足を踏み出しながら腰を位置替えにして舞う。右回りで、カラス飛びはない。

次に、規則正しい引き鈴になり、袖を巻きながら体を上下させつつ回り舞う。扇を閉じ、閉じた扇をかかげ、袖を巻き<sup>注7)</sup>、向かい合って座舞となる。立ち上がってからも、同じように舞う。

そして、の太鼓のリズムで、獅子が口をカパカパさせながら入場し、舞人二人と交代する。この“獅子”は、いわゆる“一人立ち”の獅子で、県南部の（例えば日南市）の獅子舞や県央部の祭礼で辻毎に舞う（露払いの役も兼ねて）二人立ちの獅子とは全く別で、雌雄の猪である。面の色が赤系と青系なのは、おそらく赤＝雌、青＝雄と思われる。白衣の上に頭から麻の衣を被っており、シッポがついている。

獅子の舞（カパカパさせながら祭場を回り舞う）では、の太鼓のリズムに変わり、さかんに“はやし歌”<sup>注8)</sup>が歌われ始める。

獅子も「尾八重神楽の音楽②」で書いたように、東西南北中央の、いわゆる“五方固め”を行う。

その後、『荒神』が爪先立ちしながら足を高く上げながら入場し、体を伸び上げらせながら舞う。

赤い鬼神面に黒ひげの植毛がしてあり、古い能面の系列を引く面と思われる。飾り毛頭を被り、白装束に赤い1本の櫛を肩から斜めにかけた姿で、右手に鬼神棒<sup>注9)</sup>を持ち、左手は装束の袖口をつかんで舞う。はじめ右回りに舞い、次に逆の左回りに舞った後、鬼神棒を杖がわりにして伸び上がったたり、正面に向かって立て膝で鬼神棒を捧げ持つ。なお、これらの所作は、宮崎市（平野部）の『鬼神舞』の所作によく似ている。

この、『荒神』は、獅子と入れ替わりで登場するのであるが、その直前の獅子は立った姿勢でカラス飛びをしながら退場していつている。また、『荒神』が入ってくると太鼓の楽板打ちが始まる。

後半になると再び獅子が入場し、カラス飛びをしながら口をパカパカ言わせながら荒神と戯れる。この時、荒神は鬼神棒を左手に持ち替え、右手で日の丸の扇をかざしつつ舞うのである。


最後に荒神が両手に獅子をつかまえて共に舞い、祭場から押し出しつつ、自分も退場する。

#### 5. 拾七番磐石<sup>バンゼキ</sup>

着面の一人舞で、天鈿女命の舞と言われる。豊作と子孫繁栄を願うと共に、生活文化を伝えながら廻うオゴゼ<sup>注10)</sup>の役でもあるという。黒い古面（能面の媼に酷似した面）を着け、黒い頬被りをし、明らかに老女と分るかっこうと腰の曲がった舞いぶりである。赤い櫛で背に大きな籠を背負い、腰には藁で編んだ薦袋を下げ、房のついた鈴を左手に短い五色幣を持つ。祭場には這いながら入っていくが、筆者が直接取材した昭和62年（1987）の祭の際には、入場前に社人に背負われて祭場外の出店を回っていた。

神歌は歌わず、裏声で囃子方と会話し、等のゆっくりした太鼓のリズム

に合せて腰を曲げながら足を片方ずつ引きつけながらゆっくりと祭場を鈴を鳴らしながら回る。(五方固めか?)太鼓が流し打ちになると同時に上を仰ぎ見ながらジャラジャラと鈴を持ち上げ鳴らす。

ひとしきり回り舞い終ると、太鼓方に寄っていき、“婆さん邪魔をするな”と言わせ、囃子が中断し、“婆さん”が裏声で語りかける。御幣を渡した後、再び囃子が始まると、の太鼓のリズムに合せて袋からしゃもじと飯椀を取り出して一舞いし、また囃子を中断させる。“これは大切なものである”という意味の語りの後、囃子が始まると、一回りした後、尻をつき、足を突き出して座り、回りながら飯を椀につぐ仕草をする。

次に、太鼓に差してあった大きなしゃもじ型の採り物を取り、天に突き上げるようにして両足で跳びはねた後、大しゃもじで祭場をすくって回る。


最後に、おもむろに股間に手をやり、また囃子を止めさせて語り、京芋<sup>注11)</sup>の男根を見せ、男女の交わりを表す卑わいな(?)所作をしながら祭場を回り、退場していく。

## 6. 拾八番神和


六神様ともいい、下照姫の舞で天若彦を慰め祀る神面(女面)の舞である。

装束は、あでやかな模様の黒留袖姿で別に赤い帯締を垂らしたまま、白い頬被りの上から白の毛頭、宝冠を被り、眉の描かれた丸い目の女面をつけている。懐剣を帯び、右手に長房のついた閉じた扇と、右手には、平野部(宮崎市)では女幣<sup>メビ</sup>と呼ばれる大きな三角形の五色幣の採り物を持つ。

伶人に手を引かれて入場し、足をすり足(はじめ女幣を肩に担いで扇の方は前に捧げ持つ)で引きつけながら、ゆるゆると腰を振りながら祭場を巡り、一回りする度に御幣を両手で持って突き出して祓うような所作をくり返す。

次に、太鼓が流し打ちが入ってくる早いテンポのリズム になると、御幣を右肩に担ぎ、左手は刀印<sup>注12)</sup>を結んで舞う。続いて左手を肩に刀印を結んだまま、右手で閉じた扇を逆手に持って廻る。この間の歩み廻りは膝を曲げ、重心を落としながらも、腰をゆるゆると振りながらの軽い舞いぶりである。

右手逆手のまま祝儀用の扇を開くと、刀印を結んだまま舞うが、囃子は変らない。

の囃子のまま、ひと通り廻り終ると、最後に両手で下向きの印を結んで退場する。

最後の印を結んで退場する以外は、この舞いぶりは、宮崎市平野部で「中の手」<sup>ナカ テ</sup>「氏舞」<sup>ウジマイ</sup>と呼ばれる、“天鈿女命の舞である”とされる番付の舞と殆んど同じである。

## 7. 尾八重神楽の音楽

今回は、「獅子・荒神」「磐石」「神和」の3曲を記したが、序奏、終了部(太鼓の流し打ちが多い部分)は省いた。

また、記譜した部分は、あくまでも筆者が聴き取れた範囲で採譜したもので、また何度も繰り返すようだが、五線譜に表せるものには限界があることは承知していただきたい。特に笛は“あしらい吹き”と思われる部分も多く、律も統一されていないので、不完全である。

また、神歌と神楽ばやしについては②で例示してあるので、今回は記していない。

「獅子」と「神和」の前半部分の太鼓のリズムは同じものと言って良い。2拍子系の3連符型とし



てとらえたが、この3連符の1拍目はしばしば前打音的に  $\overset{\curvearrowright}{\text{フ}} \text{タ}$  のような演奏がなされるが、故意にリズムを崩している感がある。西米良村の村所神楽を卒業論文として取材した時<sup>注13)</sup>にも尋ねたところ、“酔っぱらって居眠りしながら太鼓を打つからずれる”という説明であったが、果して尾八重神楽もそれで説明がつくかどうか、はなはだ疑問である。筆者は、“故意にリズムを崩している”と考える。後述するように、これは宮崎市平野部の神楽（例えば生目神楽）と酷似しており、天鈿女命の舞とされることも多く、その腰を揺らしながらの舞いぶりから、「磐石」と同じように生殖行為を表わすリズムではないのだろうか。残念なことに、平野部の「磐石」に相当すると思われる「田の神」<sup>注14)</sup>には入退場時にわずかに太鼓が大きく鳴るだけで“音楽”と言える種のものはついていないので推測するしかない。

しかし、何よりも驚いたのは、「神和」の舞と音楽が<sup>イキメ</sup>生目神楽等の宮崎市平野部の、先述した「<sup>ウジ</sup>氏舞」や「<sup>マイ</sup>中の手」と呼ばれる演目とが全くと言ってよい位同じものであることだ。

いわゆる“譜面上”の同じリズムが各地に存在することは、当然のこととされている。細かな違いがあることは、例えば、宮崎市内の神楽の太鼓のリズムは同じであるがディナーミクには大幅な違いのある「鬼神」舞については既に報告済みである。

その上で考察すると、これは「神和」と「氏舞」「中の手」は同じ演目で、双方の神楽に交流があったことを示すのではあるまいか。

もとより、尾八重神楽の起源は宮崎県中央部の沿岸地区にある都萬神社が関わっていることは冒頭に述べた通りである。

この都萬神社にも神楽が奉納されており、“<sup>タカナベ</sup>高鍋神楽”の系統であるとされている。②で述べたように、この神楽の調査も必要なのであるが、それはまた別の機会に譲りたい。

実は、同じような例が、やはり生目神楽と、<sup>モロツカ</sup>諸塚村の桂神楽にあることを筆者は偶然発見した。平成24年に宮崎県庁で奉納された諸塚村桂神楽の岩戸開き関連の演目が、やはり岩戸開き関連の演目で、<sup>フトダマノミコト</sup>太玉命が岩戸開きに使う櫛を根こそぎ抜いてくる様子を表わす生目神楽の「太玉」に演出も（櫛持ちが生目の場合、着面のもどきの役であることを除いて）音楽も全く同じなのである。

それから考えれば（地図1参照）尾八重神楽と例えば生目神楽との交流があったと仮定しても良いと考えるのである。

## 8. おわりに

まだまだ多くの演目が残されているので、引き続き「尾八重神楽の音楽④」が必要になってくるのは明白である。

7. で述べた発見は、おそらく神楽を伝えた修験者により伝えられたと考えてはどうだろうか。県内の神楽の解説に、「剣を使った修験色の濃い神楽である」という文章が、しばしば山間地に伝わる神楽（高原町の祓川神楽等）に使われるが、『里修験』と呼ばれる平地を回った修験者たちも多いのである。

また、尾八重神楽の特徴の一つに、“里芋”が使われる演目があることが挙げらる。先述した「磐石」の男根部は他所ではすりこぎが使われることが多く、また、「八子舞」で折敷に里芋の親芋である八頭を使うのも珍しい。これは、例えば同じ米良神楽の系統の西米良村村所神楽では米が使われていることと比べると、坪井洋文<sup>注15)</sup>が唱えていた、「日本＝田（稲）作農耕文化」だけではなく、

イモを中心とする畑作文化があったことを示すものではないだろうか。

また、“カラス飛び”の謎もある。②までで、筆者は、この足どりは日本人独特の立ち居振るまいのルーツから来ているのではないか、等々と述べたが、本学の佐々木准教授（ダンス関係者）によると日本舞踊には珍しい“ツーステップ”に相当するという。

このように、尾八重神楽は更に掘り下げていくと、非常に興味深い新しい発見がまた出てくるのではないかと期待しつつ、今回は筆を置くことにする。

#### 付 記

本編の対象とした尾八重神楽については、インターネットで“西都市尾八重神楽”を引くと、昨年度紹介したMORI MORI氏や高千穂町教育委員会による秀逸な画像が見られるので参照されたい。

大分県

三川内神楽 ● 市

● 鹿川神楽

● 高千穂系神楽

● 浅ヶ部神楽

● 森野内神楽

● 野方野神楽

● 古戸野神楽

● 桂神楽

● 戸下神楽

● 南川神楽

● 宇納間神楽

● 延岡・門川系神楽

● 門川神楽

● 椎葉系神楽

● 十畳川神楽

● 嶽之枝尾神楽

● 桐尾神楽

● 大河内神楽

\* 焼畑狩猟神楽園 (山地神楽園)

熊本県

● 米良系神楽

● 銀鏡神楽

● 村所神楽

● 小川神楽

● 狭上神楽

● 都農神楽

● 高鍋系神楽

● 新田神楽

● 比木神楽

● 巨田神楽

● 村角神楽

● 生目神楽

● 船引神楽

● 宮崎・日南系神楽

● 野島神楽

● 潮砥神楽

● 隠本神楽

● 櫻原神楽

● 霧島神楽系

● 駿川神楽

● 狹野神楽

鹿児島県

\* 稲作畑作神楽園 (平地神楽園)

\* 近海漁撈神楽園 (沿岸神楽園)

日向灘

〔凡例〕

● 神楽の系統

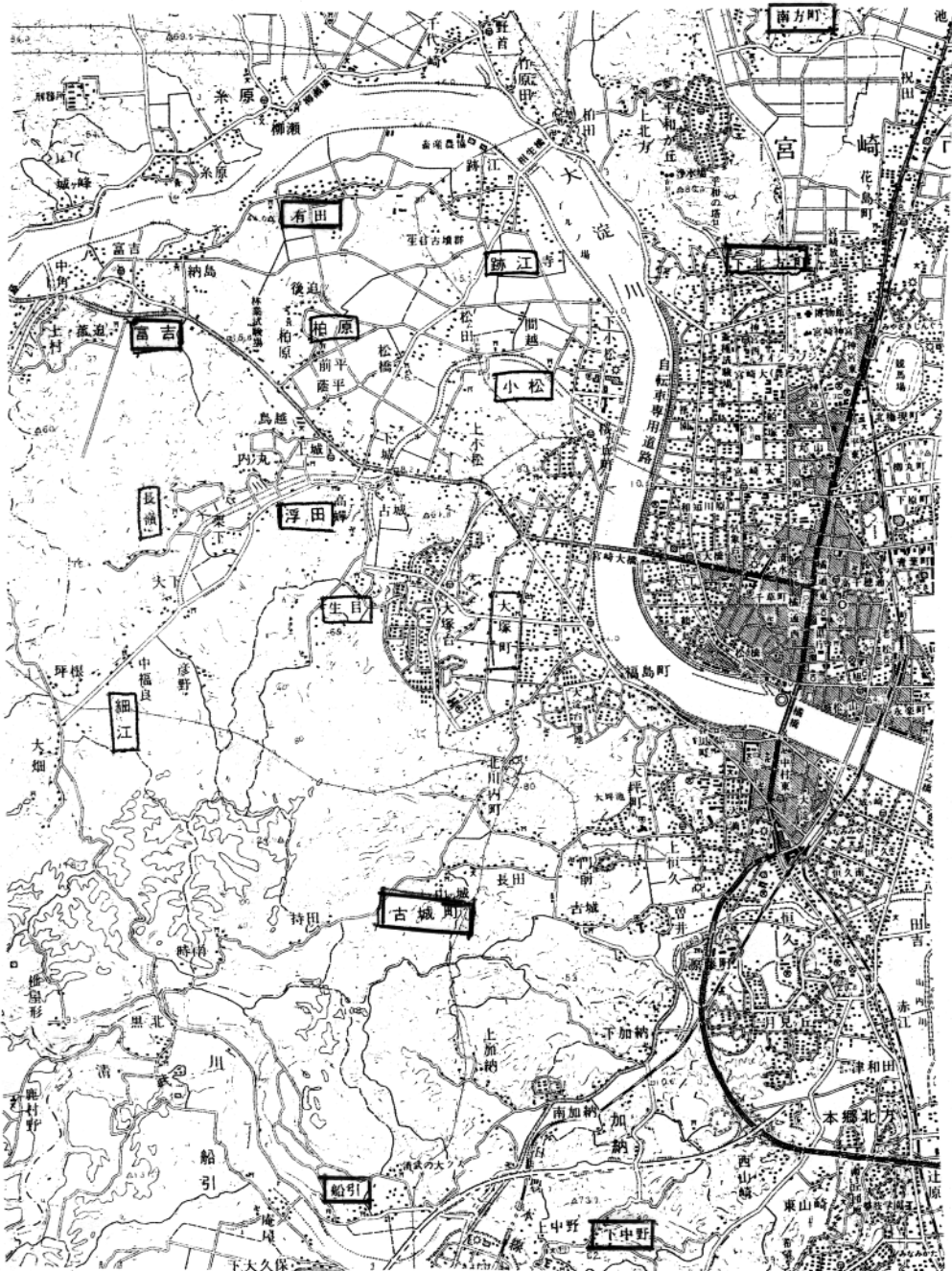
● 代表的神楽名称

は筆者記入

— 25 —

〔旧生目村とその周辺〕

□…神楽伝承地



地図 2

## 注

- 注1) 『宮崎学園短期大学紀要第1号』P.P.59～P.P.67 黒木亜美子 尾八重神楽の音楽①  
『宮崎学園短期大学紀要第4号』P.P.43～53 黒木亜美子 尾八重神楽の音楽②
- 注2) 以下の記述は『西都市米良山中 尾八重神楽』尾八重神社 尾八重神楽保存会 宮日文化情報センター（2012）による。
- 注3) 都萬神社は、祭神は木花開耶姫命であり、天孫瓊々杵尊<sup>ニニギノミコト</sup>の皇妃である。創立年代不詳。この地で瓊々杵尊が木花開耶姫命に「自分は汝を妻とせん」との勅言をもって妻万宮<sup>ツマ</sup>といい、またこの地方を妻という。棟は最古のものは承和4年（837）再興の分を始め、100年を越すものが20有余枚現存する。特殊神事として、旧暦の7月6日・7日に行われる更衣祭、俗に「七夕様」と呼ばれる神事がある。ご神像は童神で、6、7日に浜下りをした後、童神に白衣、紅、白粉及びオオツキと称する繭で作られた綿帽子で着付け化粧をするが、この日信者から奉納される白衣などの多少により、その年の豊凶・天候が占われる。～『宮崎県神社誌』昭和63年（1988）9月30日 宮崎県神社庁発行 凸版印刷株式会社 による。
- 注4) 神楽番付表には「獅子舞」とのみ記してあるが、DVD版（2012 尾八重神楽保存会作成）では、獅子舞（荒神）の三人舞と記されている。
- 注5) シシ獅子という場合、鹿と猪を指すことが多いが、この番付におけるシシは、その所作からつまり泥場を転げ回ってダニ等を落す動作や、腰を落して猪の歩く様を表わすことから明らかに猪のことを指すと考えられる。
- 注6) 尾八重神社の場合、“違い鷹”である。
- 注7) この所作は“魔を払う所作”と言われている。
- 注8) 高千穂神楽等では“せり歌”、諸塚神楽では“ぜぎ”等とも呼ばれる、観衆が興に乗って歌いはやす即興性の高い歌のこと。この場面では女性が歌っていた。囃子のリズムにぴったりと合って歌われているのは珍しい。
- 注9) 細い竹（身の丈ほどの長さ？）に色紙を巻き、両端に五色の房をつけた物。宮崎県の神楽の採り物としては一般的である。
- 注10) 通常、米良地方の“オゴゼ”というと、海魚のオゴゼを指し、オゴゼを猟に持っていくと、山の神が“自分より醜い容貌のものが居る”と喜んで獲物がたくさん取れる、というのが通説である。この場合は“容貌の醜い女性”の意味になるのだろうか。
- 注11) 里芋の一品種で細長い。葉柄に黒いすじがあり、子芋は九月ごろから発育する。一國語大辞典 小学館 昭和56年（1981）
- 注12) 手の中指と人差指2本を突き立てた印で、いわゆる“九字切り”の後に結ぶ印のこと。宮崎の神楽に殆んど見られ、舞楽にも見られる。
- 注13) 昭和53年、同54年12月に村所神楽の奉納を取材した。
- 注14) 小野重朗ら民俗学関係者は、山の神楽の「磐石」が、平野部の作神楽の「田の神」になった～山の神が平野に春降りてきて「田の神」となり、豊作をもたらし、秋にまた山に帰っていった豊猟を約束する神となる、と考えている。
- 注15) 「イモと日本人」 坪井洋文 1979 未来社





(写真1 獅子)



(写真2 磐石)



(写真3 神和)

#### 参考文献

- ・ 吉川周平編「民俗芸能における神楽の諸相」京都市立芸術大学  
日本伝統音楽研究センター 2009
- ・ 黒木亜美子「宮崎市の神楽の音楽－生日神楽の場合」宮崎女子短期大学紀要第11号 P.P.10～37  
宮崎女子短期大学 1984
- ・ 黒木亜美子「尾八重神楽の音楽①」宮崎学園短期大学紀要第1号 P.P.59～53  
宮崎学園短期大学 2008
- ・ 黒木亜美子「尾八重神楽の音楽②」宮崎学園短期大学紀要第4号 P.P.43～53  
宮崎学園短期大学 2011
- ・ 佐々木昌代、元水均、中武貞夫「尾八重神楽の伝承」宮崎学園短期大学紀要第2号  
P.P.125～143 宮崎学園短期大学 2009



- (楽譜1)**
- 注1) ♩ = 72
- 獅子 前半
- 
- 笛  
鼓
- 8v.
- 3-
- 〜
- 注2)
- 太鼓及び樂板

注3) 8v. (楽譜2)

パンゼキ  
磐石 前半

笛

太鼓

8v.

笛

注4) 8v. ♩ = 138

磐石 後半

太鼓

銅拍子

♩ = 72

カンナキ  
神和 前半

(楽譜3)

注5) 笛

打楽器

注6)

注7)

※ つなぎの部分の後は「四方鬼神」の「中央」と同じ

楽譜注)

- 注1) 基本的に尾八重神楽の囃子の笛は干<sup>カン</sup>と言われる1オクターブ高い音を使うので、8v.と記されているものは記譜音より1オクターブ上の音を示す。
- 注2) 囃子とは、大型の外杵付締め太鼓と横笛と銅拍子の他に、楽板と呼ばれる、太鼓に別に取り付けた板があり、高千穂神楽の杵打ち等とは別種の一個の楽器とみなされ、太鼓と同じリズムを打つことが多い。
- 注3) 「磐石」の笛は、故意に音がずらされており、譜面の音より1/4程度低く奏されていることを↓で記した。
- 注4) このリズムは、松永建が3拍子ととらえているリズムで、他の米良神楽にもしばしばみられるものである。
- 注5) ここで記している「打楽器」とは、太鼓・銅拍子・楽板の全てを指す。
- 注6) この打楽器のリズムもまた故意に崩してあると考えられ、便宜上3連符で記したが、実際は“つんのめる”ようなリズムである。
- 注7) 注1)で述べた通り、笛は干の音が大部分であるが、この部分だけ実音通り吹かれる。

